

デイサービス通信



愉快的な罰ゲーム

デイサービスでよくやるレクレーションに「しりとり」があります。最後に「ん」の字のつくことばを言った人に、後で罰ゲームを行ってもらいます。

その罰ゲームに最近「きゃりーぱみゅぱみゅ」と早口ことばで3回言ってもらうことをしています。お年寄りには聞き慣れないですが、これはれっきとした女性歌手の名前だそうで、こんな言いにくい名前をよくも付けたもんだと思いつつも、自分で言っても中々うまく言えません。利用者さんも「きゃりーぱみゅぱみゅ？」と何度言ってもおかしく成るばかりで、廻りからも笑いを誘います。

「しりとり」も白熱すると、自分の番でなくてもあちこちで答えが飛び交います。そんな人にも罰ゲームのカウントが入ります。楽し・おかしいひと時を「しりとり」ゲームがかもし出してくれます。

5月には、全国ふれあい書道展に出品する「書道」に取り組みました。相田みつをの書よりもどの方も、のびのびと個性的な字を書かれました。



思い思いの書を楽しんで

上野のり子
うみが

ヘルパーだまり

No.13

平成6年3月より継続しているケアがあります。Aさん75歳、身体障害者で、外出は電動車椅子、自宅では充分立って歩けず、這って行動されています。週2回の買い物や調理等の家事支援と通院の付き添いをまごころが担い、他の事業所も家事支援をサポートしています。

ご主人も同じ身体障害者で、特に麻痺の身体で手足の突っ張りには強いもあり、緊張が起きると無意識に動き、外来通院時には特別の注意が必要でした。電動車椅子でパソコン教室等に通われて、自宅でも復習、熱心な姿が見られました。

ご夫婦励ましあって、体力が落ちないように自宅で筋トレ、食事にも注意され、病気にならないようにと気持ちを大事にしてみえましたが、年齢とともに無理となり、昨年12月末にご主人は施設へ入所されました。

今、Aさんも、時々電話でご主人とコミュニケーションをとっておられるとか・・・ご主人の入所施設へショート利用でお会いされたりしています。

ご夫婦別々の暮らしとなっても、心は通っておられ、仲の良いお二人に、ヘルパーとしても声援し続けたいと思います。



利用者さんからのことば・・・

長年にわたり、地域社会の中で生活してきました障害者です。これもひとえに、支援して下さるワーカーさんたちのお陰と日々感謝の念で一杯です。これからもよろしくをお願いします。



心づれ



発足当時をふりかえる

当会が20周年を迎えられたことを感慨深く思っている発起人の一人です。このコラムに発足当時のことを書いてほしいと依頼を受け「まごころ」会報の縮刷版を読み返した。

■そこには、多くの皆様に支えられ、積み上げられた時間の重さがあり、お世話になった皆様のお陰だと改めて感謝を深くした。そして、時代が変わっても福祉の原点は変わることがないと強く感じた。

■「まごころ」発足より2年前「まごころ」前身グループ・コスモスが立ち上がっていた。当時は、介護地獄が表面化、自分の老後をどうするか考え始めていた11人が、助け合いによる介護の社会化を目指していた。急速な高齢化と少子化で家族介護力の低下に、介護は大きな社会問題になっていたからだ。全ての地方自治体に「老人保健福祉計画」の策定を義務づけ、国から地方に福祉がまかされるという画期的な福祉行政の転換期だった。

■そんな折、一宮市の福祉サービス実情調査を、地元のタウン誌から依頼され、はじめて高年福祉課の方々に会うことになった。実態は、まだまだ貧弱な措置福祉。まだ介護は家族が行うもの、市のサービスは十分利用されず、利用されないサービスは、既存のサービスをも後退させる現実も見た。これが市高年福祉課と長年にわたって率直な意見交換をしていく始まりになった。



会員宅を借りて事務所開設
平成5年6月7日

■無償サービスは依頼しにくく、長続きしない。ケアを受ける人も、する人も対等な関係を守り合うための有償サービスを行いたい。しかし「有償サービスは向こう10年は無理」という行政関係者の意見や「有償活動は金儲け」という風潮に困惑。加えて「素人に介護が出来るか」などの不安に背中を押してもらったのは、一方ならぬご指導いただいた瀬戸センターさん。「とにかく始めることです」の一言だった。一歩出なければ何も始まらないのである。また「素人が大切、何よりもお年寄りの人格を尊重する介護であれば、介護は誰でも出来る」聖心堂医院伊藤先生から介護の基本中の基本をスタート前に教わったことは心強かった。

■準備から2年「自分だったらどうしてほしいか」を視点に、時間貯蓄も含めた住民参加型在宅福祉サービス団体・尾張地域福祉を考える会まごころサービス尾張センターが誕生した。開設後の反響は思いもかけないものだった。

■当時はまだ措置福祉。制度の枠内でしかケアが受けられない。当然だが、制度の狭間で苦しむ方々が多々あった。私達はそれを受けケアをした上で、必要なサービスであることを市に提言していった。

■こうしたケア活動からは、また必要な次の活動が生まれていった。そして少しずつ道は出来、今につながった。それはどんな時にもみんな一緒に進んできた道。この道はずっと続くのだと思っている。

賛助会員(前代表) 平田和香



男性のための介護講座
平成9年2月

